「底が突き抜けた」時代の歩き方 445

死者の身になって考えよ ── 映画『父と暮せば』

《臨床で実際に悲惨な体験をした人の話を聞いていると、極限の体験を語ることについて「記憶」という言葉は力がなさすぎると思う。普通の「記憶」は遠く小さく、薄い影絵のようなイメージだが、極限の記憶は、それとはまったく違うものである。言うならばそれは空間を占める黒々とした物体である。物体の闇の中には戦慄や恐怖や情念が満ちている。体験した者はその物体の全体を見ることも味わうこともできず、しかしそれはその人の現在にも未来にも立ちふさがって、視界をさえぎってしまう。

おそらく兵士にとっての南方戦線やシベリアの収容所の体験は、そのような体験の中でもとりわけ重く黒く、時には岩のように人を押しつぶしたのだろう。その重さによって生きる意志を失って命を落とした人や、帰国できても、それまでの人生を取り戻すことなく、戦争の影のようにしか生きられなかった人もいる。

一方で、生き延びて体験に向き合う人もいる。そのような時、重い体験は人の内に、またその生きる世界にどのように統合されていくのだろうか。ひとりの画家のそのプロセスと彼の絵画が伝えるものが、立花隆の力ある筆で、余すところなく描かれる。》

この文章は、立花隆『シベリア鎮魂歌 ── 香月泰男の世界』（文藝春秋）に対する小西聖子の書評（０４．９．５付毎日）の冒頭に当たる部分である。この書評によれば、山口県三隅町に生まれ、画家となった香月（かづき）泰男（１９１１－１９７４）は４３年に応召され、満州で終戦を迎えた。その後、満州に南下してきたソ連軍に捕らわれた《香月らの日本兵を乗せたソ連の貨車は、北へ西へ、アムール河を越え、エニセイ河に至り、シベリアの収容所生活が始まる。特に最初のセーヤの収容所の状況は劣悪で、三ケ月で１割以上の者が死んだという。栄養失調と過労が原因だった。香月の復員は１９４７年であった。》画家香月泰男は《黒い太陽や、シベリアの収容所へ送られる兵士の顔》を描いたシベリア・シリーズでよく知られているが、《興味深いことに、帰国直後に書かれた二点は、ほかの作品と異なり、抑留体験の悲惨さから逃れるような暖かい色彩の絵である。その後しばらく、香月はシベリアをまったく描けなくなる。そして８年後、レンガ塀を作る左官を見たことをきっかけとして、シベリアでのレンガ積み作業が想起され、そこから一連のシベリアの絵の製作が始まる。》

シベリア抑留という言葉に接して想起されてくるのは、３４８号の通信で取り上げている詩人の石原吉郎であり、彼の同僚鹿野武一である。石原のエッセイ『ペシミストの勇気について』の中で、鹿野は収容所での取り調べ官に対して、「もしあなたが人間であるなら、私は人間ではない。もし私が人間であるなら、あなたは人間ではない。」と

答えており、その言葉のあまりものシンプルな鮮烈さによって私の脳裡に記憶されている人物であるが、「他人よりもながく生きのこる」という発想を突出させずにはおそらく生き残ることができない過酷な収容所の中で、鹿野が絶食することになった理由について、石原はこう書きとめている。
《メーデー前日の４月３０日、鹿野は、他の日本人受刑者とともに、「文化と休息の公園」の清掃と補修作業にかり出された。たまたま通りあわせたハバロフスク市長の令嬢がこれを見てひどく心を打たれ、すぐさま自宅から食物を取り寄せて、一人一人に自分で手渡したというのである。鹿野もその一人であった。そのとき鹿野にとって、このような環境で、人間のすこやかなあたたかさに出会うくらいおそろしいことはなかったにちがいない。鹿野にとっては、ほとんど致命的な衝撃であったといえる。そのときから鹿野は、ほとんど生きる意志を喪失した。
　これが、鹿野の絶食の理由である。人間のやさしさが、これほど容易に人を死へ追いつめることもできるという事実は、私にとっても衝撃であった。そしてその頃から鹿野は、さらに階段を一つおりた人間のように、いっそう無口になった。》
　人間の本性というものが容赦なく剥き出されてくる冷酷な極限状況下で、「人間のやさしさ」に出会ったとき、感動のあまり涙が溢れ出て、生きる希望が湧き上ってくるのではなく、反対に「生きる意志を喪失」することになるのを、どう考えればよいのだろう。通常は「人間のやさしさ」に出会えば、誰でも嬉しくなるだろう。ハバロフスク市長の令嬢は、みすぼらしい身なりの日本人受刑者たちが黙々と清掃作業に従事している、その痩せこけた姿を見て、彼らに自分の手で食物を与えた。その彼女の振る舞いのどこにも非難されなくてはならない瑕疵（かし）はなかった。むしろそこには人間の美質が溢れ返っていた。しかしながら、鹿野たちは彼女の「やさしさ」を「やさしさ」としてそのまま素直に受けとめることのできる場所には存在していなかったのである。他人にやさしさを示すことは確実に自分の寿命を縮めるような環境に置かれていたのだ。そんなところで「人間のやさしさ」に出会って、「鹿野は、ほとんど生きる意志を喪失」したのである。
　もちろん、鹿野以外の日本人も鹿野と同様に、「生きる意志を喪失した」わけではない。「人間のやさしさ」がそのまま受けとめられない場所に放り込まれていたなら、彼らは一様に喜ぶこともできなかったにちがいない。喜びの感覚を深く欠損していただろうからだ。おそらく鹿野以外の日本人は「人間のやさしさ」を受けとめることもなく、動物のように彼女の手から与えられる食物を受けとったのかもしれない。石原の記述から想像するに、鹿野だけが喜びの感覚を欠損した場所で「人間のやさしさ」を受けとめたのである。更に想像をたくましくすれば、彼は「人間のやさしさ」に出会って「致命的な衝撃」を受けたというよりも、「人間のやさしさ」を喜んで受けとめられなくなってしまっている自分（たち）の人間的な感覚の欠損に直面させられて、「致命的な衝撃」を受け、「生きる意志を喪失した」と考えられる。つまり、彼は「生きる意志を喪失」するほどに、「人間のやさしさ」に出会い、それを受けとめたのである。

香月泰男もまた、石原や鹿野がいたのと同じシベリアの収容所で生活していたことを忘れてはならない。《移送される兵士や、帰国する自分、満州の砂漠に朽ちる白骨など、その後は毎年数点を描き、やがてテーマはより抽象的で高次元のものとなっていく。遺作となるのはシベリアの太陽と月、ナホトカの渚である。シベリア・シリーズはただ執拗に描き続けられただけでなく、そのテーマや視点が変化していく。香月はシベリアから逃れたいという気持ちと、描かねばならないという気持ちに常に引き裂かれていた。》

書評者の小西聖子は《香月泰男とその絵に対する敬意》と、著者の《立花隆に対する敬意》を表しながら、《悲惨な体験からひとつの物語を作り出すのは苦痛を伴う大変な作業である。しかも香月の物語は真摯で、残酷や虚しさや不安に直面しながら、個人の受難の物語には終わらない。やがて冷酷でも狭量でもない世界に到達していく》と評し、香月の世界を追求する立花の視野の拡がりにも目を配る。

《シベリアまで出かけて自分で香月の世界を経験し、丹念に取材する立花も、画家への敬愛の念を持ちつつ、一方で、冷静な世界の追求を忘れない。当時、シベリアの強制収容所にはたくさんの収容者がいたが、もっとも多くを占めていたのはソ連人自身であったこと、またドイツ人捕虜も日本人捕虜の何倍もいたこと、ソ連という大国が「丸ごと収容所群島になってしまい」、「自国民はもちろん、周辺国家から連れてこられたさまざまの階層の人々が片端から送り込まれて、奴隷労働を強制されたという」国家的悲劇の一部であったという巨視的な見方をすることが必要だと述べる。》

石原や鹿野や香月らの「個人の受難の物語」は、ソ連そのものが「丸ごと収容所群島になってしま」っているという、共産主義の理想が音を立てて崩れていく人類の悲劇の大きな物語の飛沫にすぎなかったことが示唆されているが、彼らシベリア抑留者たちが数年後に帰国したとき、戦後日本の社会は戦争の理不尽な犠牲者のような彼らをあたたかく迎え入れたわけではなかった。「アカ」に徹底的に酷使されてきた彼らを、よりによって日本の社会は「アカ」として差別したのである。ナチの強制収容所から命を得て帰還したユダヤ人たちが各々の郷里でどのように迎え入れられ、そして日常生活に溶け込めずに強制収容所でも生き抜いた命を自らの手で断っていく者が少なくなかった事実が想い起こされる。映画『父と暮せば』で描かれていたように、生き残った被爆者たちが世間から隠れるようにして負い目を抱きながら生きなければならなかった、ということとも通じているにちがいない。

シベリア抑留者たちは日本へ帰還することを夢みて生き長らえてきたにもかかわらず、恋い焦がれた日本の社会が自分たちをどのようにみているかに気づき、深い傷を負わないわけにはいかなかった。過酷なシベリア抑留で刻み込まれた癒しがたい傷を抱えて乗り切ってきたのに、その生傷に塩を擦り揉むような非道い仕打ちを日本の社会は行ったのである。彼らはどのようにしてその仕打ちに耐えたのか。詩人の石原であれば詩作に打ち込むことによって、画家の香月であればひたすら描き続けることによって、耐えたのであろうか。本当に耐えることができたのかどうかわからないけれども、詩を書くこ

とによって、絵を描くことによって、彼らは耐えようとしたと想像される。詩を書き、絵を描くことでシベリア体験を忘れ、世間の冷たいまなざしから逃れるようにして耐えたのではない。彼らの詩や絵はシベリア体験に彼らをますます向き合わせていき、何度も自問をしいられるなかで彼らは耐えていったのである。
「香月はシベリアから逃れたいという気持ちと、描かねばならないという気持ちに常に引き裂かれていた」と、書評者によって記されているが、おそらく石原も香月も「シベリアから逃れたいという気持ち」をもちつづけているかぎり、「描かねばならないという気持ち」に衝迫されていたにちがいない。彼らはもちろん、自分たちが一生「シベリアから逃れ」られないことを覚っていたのである。石原や香月とは異なる、詩人や画家ではない一般の人たちは、ではどのようにして耐えていったのだろう。なにに打ち込むことによって耐えようとしたのだろう。あるいは、打ち込むようななにも見出されずに、耐えられなくなっていったのだろうか。映画『父と暮せば』では主人公の娘はシベリア抑留者ではないけれど、「生き残った」被爆者として自分は幸せになってはいけないと思いながらこれまで生きてきた気持と、青年に恋をすることによって抑えがたく募ってくる自分も人並みに幸せになりたいというもう一つの気持とが激しく衝突し合って、呼吸困難に陥っている状況が描かれていた。
　シベリア抑留者も被爆者も、抑留体験や被爆体験として刻み込まれている傷口からも、「生き残った」後ろめたさからも共に解放されていなかった。では自己解放できない苦しさにどう向き合えばよいのか、という問いを映画『父と暮せば』は描写していたが、この映画を観て真っ先に痛感したことは、なによりも被爆者に対する私の無知であり、無関心であった。この地球上でこれまで唯一原爆が投下されたのは、自分たち日本人が住んでいる広島であり、長崎であったから、知らない筈はなかったという事実への思い込みのなかで、無知を募らせ、無関心に任せてきたのだ。なにしろシベリア抑留のことなど知らなくても、被爆者のことなど忘れていても、人は目前の出来事に追われて生きていくことができるのである。そこにはなんの不都合もなかった。自分がいまここでこうして生きている（ように振る舞っている）ことに対する存在の事実にふと立ち止まって、疑問を覚えたり不安を一瞬でも感じたりすることがなければ、人は自分にそれなりに満足してか、または不満をもちながらも、生涯を終えていくことになるのかもしれない。
　しかし、人はどう考えてもハッピーな存在ではない。ハッピーになろうとする存在ではあるけれども。人がハッピーな存在ではないのは、自分の足許に深く拡がっている奈落にかかえこまれて生きることをしいられているからである。その奈落にみつめられて、奈落をみつめて生きることは誰にとっても辛いし、苦しい。だから人は自分が奈落に深くかかえこまれた存在であることを忘れようとするし、極力奈落から目を背けようとする。生涯忘れることができるなら、目を背けることができるなら、それに越したことはないけれども、誰もが自分の人生は死の奈落にむかって突き進みつつあることを予感している。奈落の闇のなかで生まれた人間はやがて時と共に奈落の闇の彼方へ没し去って

いく存在であることを、だが人は生きるなかで幾度も思い知らされることになる。
　シベリア抑留やナチの強制収容所から帰還した者に対して人々が冷ややかな態度を示すのは、帰還者が奈落の底から這い上がってきた者であることが感じ取られたからだ。自分もまた目にみえない奈落の住人であることを薄々感じている人々に対して、目にみえる奈落の闇から帰還した存在は恐怖を喚び起こしたにちがいない。しかも帰還者は奈落の匂いをこびりつかせて、奈落の記憶と共に人々の平穏な日常生活に異物として侵入してくるようにどうしても感じられたので、人々には耐えがたかった筈である。被爆者が「生き残った」後ろめたさをどうしてもかかえこむようになるのは、自分たちが奈落の底から帰還した者であることを彼ら自身感じていたからだ。奈落の底からの帰還者はシベリア抑留者であれば、振る舞いや記憶のかたちをとって奈落は刻印されていたが、被爆者の場合はなによりも自らの身体に奈落が消去しがたい痕跡として刻印されていた。
　自分という存在はなにか、について考えることは、人間とはなにか、について考えることである。人間とはなにか、について考えることは、シベリア抑留者や被爆者としてあらわれてこざるをえなくなる人間とはなにか、について考えることでもあるが、奈落の闇から帰還した人間の振る舞いや存在の仕方、そして周囲の彼らに対する反応について考えることほど、人間とはなにか、について考えることが凝縮されていることはないと思われる。奈落からの帰還者ほど、奈落にむかって緩慢に突き進みつつある人間にとって、「相手の身になって考える」ことが自分の身として考えることになる最大の存在はありえないだろうからだ。「相手の身になって考える」ことは、これまで遠くにあると思われていた存在を自分の目の前の相手にまで引き寄せて、その相手と可能なかぎり対話する状態にほかならない。
「相手の身になって考える」ことがどこまで自分の身として考えることと重なるのかはわからないとしても、相手の身と自分の身との距離が縮まれば縮まるほど、双方の奈落が互いににじり寄ってくることも間違いない。先に映画『父と暮せば』を観て被爆者に対する無知と無関心を痛感したと書いたが、それは、被爆者がどのような思いで日々を過ごしていたかを知らなかったことを知るようになったということである。いいかえると、被爆者の胸中に対するこれまでの無関心を、もう一人の自分に対する無関心として放置できなくなっていることを思い知らされるようになったということだ。つまり、映画は私の胸中を映しだしていたのである。被爆者に対する無知、無関心は当然、彼らを直撃した原爆に対する無知、無関心として横行する。原爆に対する知識、情報が最大破壊兵器としての原爆といったことではなく、一瞬のうちに膨大な人々の住み処が地獄と化す恐怖そのこととして語られなければ、原爆は見舞われた以外の者にとっては、外の出来事にほかならなくなる。
　映画『父と暮せば』のパンフには、原爆に対する知識として、その被害や後遺症について簡潔に記されているが、その知識が生身に押し迫ってくるようになるためには、これまで空想の出来事として語られてきた地獄の様相が、原爆投下によって一挙に現実の

事態として到来することになった恐ろしさとして受けとめられなくてはならない。つまり、地獄とはけっしてあちら側の出来事ではなく、まさに我が身にいつでも襲いかかってくるこちら側の出来事であることを思い知らされるだけでなく、原爆投下の実態について知ることは、なによりも地獄はどのような具体的な惨状を伴って我々の目の前に現出してくるか、ということにほかならない。原爆投下によって惹き起こされる地獄の様相は自然の事態ではなく、まさに人間の手でつくりだされた事態であることを受けとめることによって、人間が奈落の闇に深くかかえこまれた存在であることを大きく浮き彫りにしていたのだ。

パンフには、原爆被害が次の４種類に分けられている。

１　**熱線の被害**　広島に落とされた原子爆弾は上空約５８０メートルのところで爆発した。（…）その温度は約１２０００度だった。太陽の表面温度が約６０００度であるから、まさに太陽二つ分の熱さだったのだ。そしてその直下では約３０００度から７０００度の超高温が約３秒間続いたといわれている。鉄の溶ける温度が約１５００度であるから、1.2キロメートル以内の近距離で熱線を直接受けた人は、皮膚は燃え尽き、内臓も破壊されそのほとんどが即死、または数日以内に死亡した。熱線は市内全般で火事を引き起こし、爆心地から２キロメートル以内の場所では、燃えるものは全て燃えてしまったといわれている。

２　**爆風による被害**　爆心地では１平方メートルあたり３５トン、秒速４４０メートルの爆風圧が生じた。これは大型台風の約５倍の大きさであり、半径５００メートル以内のほとんどのコンクリート建造物、1.6キロメートル以内の全てのレンガ造りの建物は破壊された。その結果倒れた建物の下敷きになったり、爆風に飛ばされて亡くなる人も相次いだ。

本編中で木下が美津江に渡した原爆資料の中で、「被害者の身体から出たガラスのかけら」が登場するが、爆風によってガラスが砕けて人体の中に入り込み、それが何年もたってから取り出される、ということは最近でもあることなのだ。

３　**高熱火災による被害**　原爆投下から２時間ほどたつと、熱線を原因とする火災が発生した。中心部に建てられていた住宅は自然発火し、また爆風によって倒された建物の台所で使われていた火気などが原因で火の手が上がったこともあり、午後２時～３時をピークに市内全域を炎に包んだ。そして爆心地から２キロメートル以内の場所では、燃えうるものは全て燃えつき、焼け野原と化した。

４　**放射能による被害**　爆発直後、爆心地から２キロメートル以内に初期放射線が強く降り注いだ。その影響で半径１００メートル以内にいた人は、そのほとんどがたとえ熱線や爆風を直接受けていなくても数時間で亡くなり、半径１キロメートル以内で、屋外にいた被爆者の半数以上は初期放射線が原因で亡くなった。

また大火災が原因で、竜巻や火事嵐が起こり、爆発後２０～３０分頃から「黒い雨」と呼ばれる雨が降った。この「黒い雨」には放射性降下物が多量に含まれていたため、

遠隔地にまでその影響が及んだ。
　その後も長時間にわたって地上に残留放射線が残り、直接には被爆しなくても障害を受けた人が数多くいた。
　後遺症については、《放射能の影響は戦争が終わった後も長期にわたって様々な障害を引き起こした。体内に取り込まれた放射線が長い年月を経て何を引き起こすのか、６０年近くたった現在でも十分に解明されていない。戦争が終わって何年も健康に毎日を送っていた人が、ある日突然死んでしまう、そんな例が数多くあった。発病した人ばかりではなく、健康な人もいつ発病するかもしれない、そんな不安と恐怖を抱きながら今もなお多くの人が生きている》と記されている。**後遺症状**として、**ケロイド**《戦争が終わってしばらくたってから、いったん治ったと思われた傷跡の組織が異常に増殖し赤く膨れあがることがあった。／このケロイドは爆心地から２キロメートル前後にいた人々で、熱線の直射を受けた人たちの５０パーセントから６０パーセントに現れた》、**白血病**《被爆者には白血病を発病する人が多くいた。若くして被爆した人ほど発生率が高く、戦後７～８年経ってから発病することが多かった。／また甲状腺がん、乳がん、肺がんなど原爆の放射線が原因と考えられるがんも多数報告されている》、**胎内被爆**《原子爆弾は母親のお腹の中にいた胎児にも大きな影響を与えた。（中略）／胎内被爆をした赤ちゃんは無事に生れてきても死亡率が高く、また一般の人に比べて頭部が特に小さい小頭症と呼ばれる人も見受けられ、障害の程度が強かった場合には知能発育の遅れが見られる場合もあった》と、列記されている。
　戦後の**核兵器保有状況**についても、こう説明されている。
《アメリカ、ソ連、イギリス、フランス、中国の５カ国により核実験は続けられ、１９８５年頃までに５カ国が所有した核兵器の総量は２２０億トンといわれる。これは地球の全ての人類を３５回殺せる計算である。／１９９８年にはインドが核実験をして核保有国に名乗りをあげ、インドと対立していたパキスタンも同じ年に核実験を行った。また北朝鮮も核を保有しているのではないかと疑われている。》またイラク攻撃で、《原爆とは違った放射能兵器である「劣化ウラン弾」が使用された》ことにも言及されている。《劣化ウラン弾とは天然ウランの濃縮処理過程で派生する劣化ウランを弾頭に使用した砲弾で、その放射能が半分になるまでの半減期は４５億年で、化学的毒性により腎臓などを損傷するとともにがんなどの放射線障害を引き起こす。／湾岸戦争、ボスニア紛争、コソボ紛争、などで、劣化ウラン弾は使用され、また日本でも９５～９６年に米海兵隊により鳥島射爆撃場で１５２０発が誤射された。》
　広島、長崎に原爆投下したアメリカの原爆開発プロジェクトについて少し触れておくと、当初はナチス・ドイツに投下目標が定められていた原爆開発は、４５年５月のドイツの無条件降伏によって投下が頓挫し、急遽（きゅうきょ）投下目標は日本に切り換えられることになった。敗戦が濃厚であった日本に原爆投下の必要性はなかったという声が戦後のアメリカで挙がったが、すでに巨額の費用が投資されていたプロジェクトは、あくまでも投下

にむかって開発を推し進めており、開発の進行と日本の敗戦がしのぎを削っている状態にあった。どんどん膨れ上がる巨額費用と秘密裡に推進されているプロジェクトは、第二次大戦の終結が近づくにつれてアメリカ議会で問題になりつつあり、大統領とごく少数のプロジェクト関係者にしか知られていなかった計画の全貌は、アメリカ議会で原爆投下の責任を問われるよりも、投下しなかった場合の責任を問われることのほうが大きい、という判断に傾いていたのである、

シベリア抑留から帰還した詩人の石原吉郎は、『確認されない死のなかで ── 強制収容所における一人の死』という文章の最初に、「百人の死は悲劇だが　百万人の死は統計だ」と語ったアイヒマンの言葉を刻んで、冒頭を次のように切り出している。

《ジェノサイド（大量殺戮）という言葉は、私にはついに理解できない言葉である。ただ、この言葉のおそろしさだけは実感できる。ジェノサイドのおそろしさは、一時に大量の人間が殺戮されることにあるのではない。そのなかに、ひとりひとりの死がないということが、私にはおそろしいのだ。人間が被害においてついに自立できず、ただ集団であるにすぎないときは、その死においても自立することなく、集団のままであるだろう。死においてただ数であるとき、それは絶望そのものである。人は死において、ひとりひとりその名を呼ばれなければならないものなのだ。

「みじかくも美しく燃え」という映画を私は見なかった。だが、そのラストシーンについて嵯峨信之氏が語るのを聞いたとき、不思議な感動をおぼえた。映画は、心中を決意した男女が、死場所を求めて急ぐ場面で終るが、最後に路傍で出会った見知らぬ男に、男が名前をたずね、そして自分の名を告げて去る。

私がこの話を聞いたとき考えたのは、死にさいして、最後にいかんともしがたく人間に残されるのは、彼がその死の瞬間まで存在したことを、誰かに確認させたいという希求であり、同時にそれは、彼が結局は彼として死んだということを確認させたいという衝動ではないかということであった。そしてその確認の手段として、最後に彼に残されたものは、彼の名前だけだという事実は、背すじが寒くなるような承認である。にもかかわらず、それが、彼に残されたただ一つの証しであると知ったとき、人は祈るような思いで、おのれの名におのれの存在のすべてを賭けるだろう。

いわば一個の符号にすぎない一人の名前が、一人の人間にとってそれほど決定的な意味を持つのはなぜか。それは、まさしくそれが、一個のまぎれがたい符号だからであり、それが単なる番号におけるような連続性を、はっきりと拒んでいるからにほかならない。ここでは、疎外ということはむしろ救いであり、峻別されることは祝福である。》

石原が敗戦後のシベリヤの強制収容所で出会ってきた多くの死に対する実感が、ここにこめられているが、大量殺戮がおそろしいのではなく、「そのなかに、ひとりひとりの死がない」ことがおそろしい、と明察されている。しかしながら、続いて「人間が被害においてついに自立できず、ただ集団であるにすぎないときは、その死においても自立することなく、集団のままであるだろう」と書かれていることは、明らかにその位相

が異なっている。大量殺戮のなかには「ひとりひとりの死がないということ」は、「ひとりひとりの死」として識別されるものがないということであり、したがって、数や統計として処理されてしまう。だが、大量殺戮のなかには「ひとりひとりの死がない」だろうか。数や統計として処理されることになったとしても、大量殺戮においてひとりひとりの死者として殺されていったのではないだろうか。

大量殺戮のなかに「ひとりひとりの死がない」ことがおそろしいというよりも、大量殺戮という一挙の生の切断によってひとりひとりが自分自身の死へのプロセスを確認する時間を奪われてしまったことが、おそろしいのではなかったか。自らの死に向き合う機会すら剥奪されていたことが、おそろしいことなのだと思われる。大量殺戮はひとりひとりに各自の死の予感すら与えなかったのだ。「人は死において、ひとりひとりその名を呼ばれなければならない」ということは、ひとりひとりの名が呼ばれることによって、死にゆく者は自分の死を確認し、自分だけの死を独占していく権利をもたなければならないということではないだろうか。

映画『みじかくも美しく燃え』の中の死にゆく男が、見知らぬ男に自分の名を告げて去る場面にしても、「彼がその死の瞬間まで存在したことを、誰かに確認させたいという希求であり、同時にそれは、彼が結局は彼として死んだということを確認させたいという衝動ではないか」という見方のなかに、「彼がその死の瞬間まで存在したこと」、彼が「彼として死んだ」ことを確認させたい相手は、路傍の見知らぬ男ではなく、誰よりも自分自身であった、という考え方を挿入しなければならないのではないか。「確認させたいという希求」や衝動を路傍の見知らぬ男にぶつけるのはあまりにも見当外れであり、死にゆく男は「自分の名を告げて去る」という「おのれの名におのれの存在のすべてを賭ける」行為の見届け人の役割を、ひそかに見知らぬ男に勝手に依頼したのだと考えられる。

「ひとりひとりの死がない」おそろしさは、なにも大量殺戮に限らない。石原が続けて書いているように、集団の中でしか生きてこなかった人間は、「その死においても自立することなく、集団のままであるだろう」。しかし、大量殺戮によって「ひとりひとりの死」が一挙に暴力的に奪い去られる事態と、集団の中の死として「ひとりひとりの死」がみえなくなってしまっている事態とは、やはり決定的に峻別されなくてはならない。大量殺戮がもたらす一瞬の生の切断という事態と、単なる集団に埋没した死を同列に置くことはできないからだ。自分だけの生として社会の中で生きることができない人間に唯一与えられていることは、自分だけの死を死ぬことである。大量殺戮は人間に与えられているその最後かつ至上の権利まで、圧倒的な暴力によって我々から奪い取ってしまうから、残酷であり、おそろしいのだ。

石原はその文章の末尾でこう記している。《生き残ったという複雑なよろこびには、どうしようもないうしろめたさが最後までつきまとう。さまざまな場所で私が出会わざるをえなかったどの他人の死も、手きびしく私を拒んだ。私は誰の死にも、結局は参加

できずにとり残された。私はどんな他人の死からも、結局はしめ出された。そしてこのような拒絶は、最後に自分が他人を、全世界をしめ出すときまで、さいげんもなくくり返されるにちがいない。生きている限り、生き残ったという実感はどのようにしてもつきまとう。単独な生者として、単独な死に立ち会わざるをえなかったことが、その理由である。

死は、死の側からだけの一方的な死であって、私たちの側 ── 私たちが私たちであるかぎり、私たちは常に生の側にいる ── からは、何のの意味もそれにつけ加えることはできない。死はどのような意味もつけ加えられることなしに、それ自身重大であり、しかもその重大さが、おそらく私たちにはなんのかかわりもないという発見は、私たちの生を必然的に頽廃させるだろう。しかしその頽廃のなかから、無数の死へ、無数の無名の死へ拡散することは、さらに大きな頽廃であると私は考えざるをえない。生においても、死においても、ついに単独であること。それが一切の発想の基点である。

私は広島について、どのような発言をする意志ももたないが、それは、私が広島の目撃者でないというただ一つの理由からである。しかしそのうえで、あえていわせてもらうなら、峠三吉の悲惨は、最後まで峠三吉ただ一人の悲惨である。この悲惨を不特定の、死者の集団の悲惨に置き代えること、さらに未来の死者の悲惨までもそれによって先取りしようとすることは、生き残ったものの不遜である。それがただ一人の悲惨であることが、つぐないがたい痛みのすべてである。

さらに私は、無名戦士という名称に、いきどおりに似た反撥をおぼえる。無名という名称がありうるはずはない。倒れた兵士の一人一人には、確かな名称があったはずである。不幸にして、そのひとつひとつを確かめえなかったというのであれば、痛恨をこめてそのむねを、戦士の名称へ併記すべきである。

ハバロフスク市の一角に、儀礼的に配列された日本人の墓標には、いまなお、索引のための番号が付されたままである。》

シベリヤの強制収容所で集団のなかの単なる番号として取り扱われてきたことへの憤怒の念が、死に至ってまで名前を剥奪された無名の死として取り扱われることの非情さに向かっているのが、ここからよく感じ取れる。単独者として人は生き、単独者として人は死んでいくことを発想の基点に置かないかぎり、どのような集団も関係も頽廃していくということだ。死はそれ自体において「重大であり、しかもその重大さが、おそらく私たちにはなんのかかわりもないという発見は、私たちの生を必然的に頽廃させる」ということは、私たちの生がまさに死にゆく生であることをみようとしないが故の頽廃ということだろう。生は生においてのみ成り立っているのではなく、死においても成り立っていることを知らなければ、生者の傲慢もけっして尽きないだろう。

また、「峠三吉の悲惨は、最後まで峠三吉ただ一人の悲惨である」ことにおいて、他の被爆者の悲惨と重なっており、その悲惨はけっして孤立してはいなかった、ということも付け加えておかなくてはならない。石原の文章は死者のまなざしに貫かれているの

が強く感じられるが、生者との対話の不可能の果てに、死者である父親との対話にまで追い詰められ、もう一歩も進めなくなっている被爆者として「生き残った」娘を描いているのが、映画『父と暮せば』である。映画の中の死者の父親は生者の娘以上によく喋るが、それは映画の設定上そうなっているからではない。青年との恋愛に立ち往生している娘の前に、最大の障害として立ち塞がっているのが死者の父親であったからだ。もちろん、そう思い込んでいるのは娘であったから、死者の父親は娘の「生き残った」後ろめたさの中からどうしても現れないわけにはいかなかった。つまり、娘は「おとったん」の気持をどうしても尋ねないわけにはいかなかったのだ。
「なひてあんたが生きとるん！」と死んだ友人の母親から面と向かって言われたり、多くの知り合いが亡くなる中で「生き残った」後ろめたさを募らせている娘は、父親にこう言う、「うちがまっことほんまに申し訳ない思うとるんは、おとったんにたいしてなんよ」。庭に転がっている地蔵の焼きただれた顔を見ながら、娘は「あんときおとったんは、顔におとろしい火傷を負うて、このお地蔵さんとおんなじにささらもさらになっとってでした。そのおとったんをうちは見捨てて逃げよった」と言う。父親が「おまいが生きのこったんもわしが死によったんも、双方納得ずくじゃ」、仕方なかったと諭すが、娘は「うちもそよに思うとった。そいじゃけえ、今さっきまで、あんときのことはかけらも思い出しゃあせんかった。じゃけんど、今んがた、このお地蔵さんを見たとたんはっきり思い出したんじゃ。うちはおとったんを地獄よりもひどい火の海に置き去りにして逃げた娘じゃ。そよな人間にしあわせになる資格はなー……」と聞かない。
　死者の父親は娘の身になって考えようとするが、娘は死者の父親の身になって考えようとはしない。そこで父親は娘にこう畳かける。「聞いとれや、おまいはあんとき泣き泣きこよにいうとったではないか。『むごいのう、ひどいのう、なひてこがあして別れにゃいけんのかいのう』……覚えとろうな」「応えてわしもいうた。『こよな別れが末代まで二度とあっちゃいけん、あんまりにもむごすぎるけえのう』」「わしの一等おしまいに言うたことばがおまいに聞こえとったんかいのう。『わしの分まで生きてちょんだいよォ！』」「そいじゃけえ、おまいはわしに生かされとるんじゃ」「ほいじゃが、まことあよなむごい別れが何万もあったちゅうことを覚えてもらうために生かされとるんじゃ、おまいの勤めとる図書館もそげなことを伝えるところんとちゃうか」
　父親は押し黙る娘にむかって、このことが分からなければ、もうお前には頼らん、代わりの誰かに頼ると言って、「わしの孫じゃが、ひ孫じゃが」と叫び、娘の結婚はお前たちだけの問題ではなくて、生まれてくる世代の問題でもあることを示唆する。「生かされとる」といういいかたで、生者の世界は死者によってもかたちづくられていることを明示しながら、原爆投下で不毛地帯と化したかのようにみえる土壌から新芽が顔を出し、被爆した生物たちも新たな巣作りに励んでいる地球の営みに、原爆投下の責任を負った人間も生き物の一員として加わっていることを遠くに描いていたように映る。

２００４年１０月１７日記